

陸

瓦

武振八七

和	書	門	類
二	〇	七	八
一	六	八	〇
八	八	〇	四
冊	架	函	號

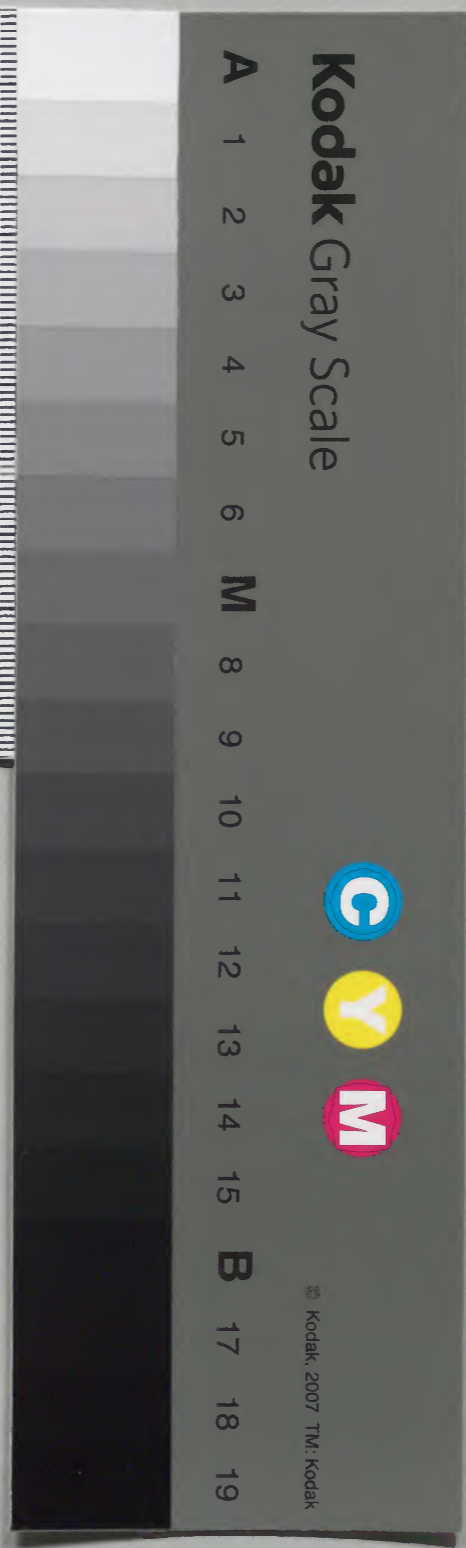
內	閣	文	庫
二	一	〇	七
一	函	二	八
二	冊	三	八
三	架	三	四
冊	架	冊	號
(四十方)			
和	書	類	類

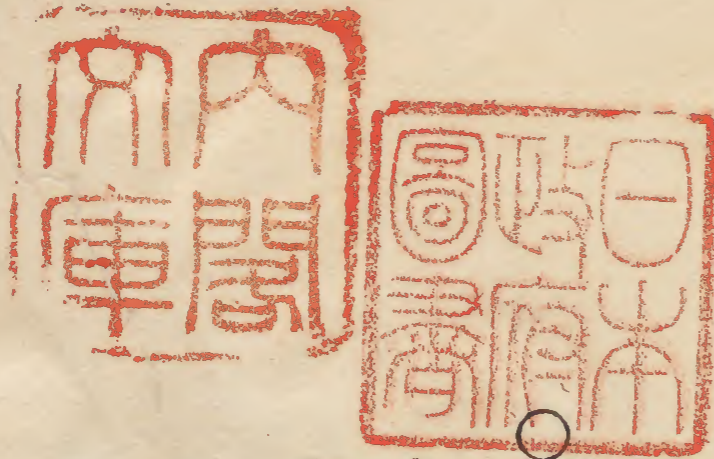
番外書册

漫筆雜考

BOOK 坂

內閣文庫	
番號	和 20784
冊數	28 ( 14 )
函號	211 304





塩尻卷才二拾七

浅草文庫

○尾浪氏仲定初中野又清女と取女は是今川  
左馬介氏豊の孫也故秋月院厄公氏豊女あり  
中絶氏あり  
田為小来り但々仲定妻子世後山口祥雲  
女と在娶後田為の執居と田為氏宅の南  
祥雲屋敷と云地也

○濃州稲葉山幹波の城立一也九系人夫義龍  
并道三城下小一禅刹と建く少林山傳燈護國寺  
と額一別傳首座と云て開祖と云別傳每子

義新は侍し法流一に禅院としてつくは梵を  
も属せしち僧祿日ありん事を法。永祿  
三年の冬事起り一に禅法清儀して寺と  
退て尾州大上瑞泉も小集舎一書と妙心も小  
單して別傳の奸邪を教へし籍と利ん人法妙  
心才一庭し籍と除るぬ義新の理は伏して和と  
法し法流とともも遠ししやうの傳文密に  
茲誅をすし法僧をひ退教せり於けは義新  
系於一弘一將軍が法し胡庭一奏一傳梵寺と  
五山は列し一業衣と下し場も法しと法し

永祿三年に川義新の法とく勅誅をす將軍家  
の教書と一業書と一ありし法もよみ義新の  
依し法流の教書下し法ししし義新が法信  
等お誅りして別傳が室と破り法流とありし  
りて名もも遠しししは際信長稲葉山と攻  
むししは法流も小法火の滅と法しししりて  
法流の衆人をも困ん滅と求む別傳と  
避しち法流と一宗の愚と法して念のやく  
法し法流とありし法し別傳に法して其の  
事實とありし法しおふんたり

傳地護國の八分の枝阜の護生禱も小のり  
付地も八分壞の後庚申堂と云りて小のり  
て地もと云り

○風流 我信小やち〜流し〜と云ふ  
新話注 風流風聲品流能檀一世謂之風流

○熱田宮御下として神幸は神樂小幸は  
貞享造替日又小幸は  
玄珠一串の外小の〜物ありり  
と云ふ又小院小古〜多候は神体と一箱  
あり禱と云り封せ〜と云ふ

古くは他り〜物の被換〜あり候は〜言ひ  
取捨りら〜やあり古ゆら〜  
か〜神堂と白地〜  
は〜と知〜毎も〜  
やま御正下と天子が授けり〜  
熱田宮下のに大字の朱印神庫の文書と押て  
ら〜と云ふ小幸也〜  
夫〜は〜や又〜神堂の中〜  
○去ル九月大神は武年造替の延喜〜  
再興の〜多かりし〜

はなして几度か之の御饌津神ケツと國常  
立尊と一して並に神宮に上小宮と一と謀る  
た宮別神宮なるに亦是の如くともとくして  
さぬに非と教へての更其詔と申ひし中世以来  
國家の内一般に神宮の上今更其東の神宮  
とも及んで増て行なひの予未の内亦かまれば  
ちかひにほつ侍所の神植と云古のいふやと  
神人等曰はれり度書の人讀之流ともしり  
是れと云更曰亦人誰をもいれりとの  
元成判りたるに亦勅撰に入外上六至るの

敷有遠のせめぬものと云今世より流て是と  
非とせし遠祖の罪人とありて刑と拓く者なと  
あふ荒由田氏人懐と念ふく詔と止とりのや  
鳴海も宮の心ゆいやと云るあり度書宮と  
國常立尊と一皇孫神相殿と云と教百年来の  
侍智とありて今日いふやと云りて季世の  
未備小定り侍人など其の神宮の中系以降  
學者希く侍所神書と云い概外之の神人の事  
出づる也是と詔といふとあり

○萬葉集四種書式

○ 一曰真名假名 考古話 二曰正字 通正字雪月花春霞 秋風等の如し 別正

字ハ霍公鳥 萩等の教也 三曰 全假字ハ川津蛙日倉定蛸垣津旗燕子卷朝 良率牛子等の類牛假名ハ記鳥子鳥 秋津羽

蜻蛉お皆貝 朝鳥 四曰義讀 全義讀春鳥鶯三五夜望月九雲 霞の類也 羊多読ト金風ニカツキ

朝鳥 アサヒ 筆多イ

按しるは延喜式の社名多しハ二種は假名是

倭本とんる者是と名知ハ誤少るべしハ凡ノ葉

の類也ハ古実体多しハ今俗抄と解して

他のもの如とある者と扱て送忘は傳傳如左

臣木 フミキ 伊予風土記と按トヨハタ 豊旗雲 ちまハ大云 袖中抄ニハ海雲と

神酒 ミキ 古佐風土記神河訓云云三輪河源出此河中在伊予水 清キ亦為大ハ神磯酒之利ハ河水ハ為酒名ト云云

波多横山 伊勢國雲出川の 午節時 タウシノサキ 伊勢ニ 今ハ合志とす

浪口 カリラク 定家兵 抄しるはかろくありと讀同

一車 コモリク 日本紀点 抄しるはカイツサ声 凡男多女者といふ

此傳本及之とあるは是と能分らむとす

○ 石卜 イシウラ 我國首麻の府後及ハ夕權占是石名

筆多イ け集は塔いり

山際 ヤマノハ 抄食志と云 今ハ世ノ 抄角乃新羅 シラキ 日ノきと云 馬使給駈 傳と云

中 一向とぼし使ハ知ト 毎年ト云ハ 山葉乃た依

良糧 ラハ 抄トコ 月ノのさす 非ハ 燒カ 加度打放中

後 の燒湯 月立 朔之 住吉ノ粉濱 四時美

見名  
 日方吹 八雲 未申の風と云ふ 俊成  
 辰巳風といへり 此の屋前屋外 拙しきやまあとと  
 出ると云ふ 又山あたましは 一御矢 鳴編  
 龍田彦風神 又新田 爰之 嬬歌 来玉 俗伝  
 加我比と云 嬬の玉篇 住玉のいと云 男女の如  
 ういかにいひ 住玉の如く 住玉の如く 亦曲なり  
 仙光抄 坂の東の流石の男女 妻花と云 村秋系  
 貴節 飲食を おまづさ 住玉の如く 住玉の如く 世の  
 花見 仁系 人の 拙山と 似たり 但 嬬の流石  
 神南備乃神 依板 尔為 松の神 南備の神と  
 カミナミ ノ カミヨリメニ スリスキ

三篇にけ神の せりま 少と 松は板と 云々と云  
 秋日と云ふ とい 依座 少と 凡神具の 依る 物と  
 いへり 住玉の 神と して 三むらと ひと 河本と  
 称せし 依座と 著向弟 著一前ハニツリれど  
 泊瀬風 赤良の 於の 附と 赤 百積裕 赤百石積 赤と云  
 傳乃 基は 赤と 百と 十と 十と 十と 十と 十と 十と  
 ちふさの 靴ひき 我れ 少と 多と 百と 十と 六の 乳  
 味 恩と 靴ひき といへり 積石 かの 入坂 瓊  
 と 八尺の 靴ひき といへり 積石 かの 入坂 瓊  
 味乃 住清 沙の 入坂 荒磯 松我 手待 兒等 波  
 アチノ スムスサ

タヘヒトリシニ

但一身にちい終つていふ莫の使雲抄をみゆ  
はくしの入の橋州と云く尾浪もも知都須佐村のり  
お雲まといはるり

水沙兒居渚座船之夕塩平將侍徒者吾社益

渚洲の松砂まつてせうきし依り遊るり

中臣板の天津の豆よとて大松といふとあり

高田 日本記ニアゲタト訓セリは集よ文と多へ上よ  
種まき等りへる詞のり実よ古語あり 志貴嶋乃

倭国者事靈之所佐国叙真福在子具

とたぢと詞具といへる注の水カハ靈

より始方おゆると皆その靈のり一ととりてさる

又一種のとたぬりり堀川洗百首歳暮のあふ

後頼司たぬのありりあさこをんしる木末あが

ら小年いこはるい抄云ことあまの年の吉凶

と云是んい国よなりて遠く我がたかとい年中

吉凶いゆると云い

興敷 コニキハ許多此詞コハタクといへ興登龜といふもコ、  
タクの音便をこころのたまといふよりありとや

八尺之嗟 サコノナキキ 長きあけきといひやのりは八尺瀧と

弓腹振起志乃岐矢二年校 志のき押といふもの  
押さるる事なる上は前こ

歳乃八歳叫鑽髪乃見安八歳まで髪を元にし

しと云女子の髪をさるる男子の元振さるる首を



八歳少ゆせり

アキツヒレ蜻領巾 怪キ領巾 歟云々 私曰うはまのくひしあふ

ヲトノヲツカハヘニツリテトノコモリイセハ大殿平都可信奉而殿隱居者云々

申旨の抜のゆめのころひ目のころけと隠居てし

いふとくられまてと淡し難かとの初禁忌

らりころいゆとと誦せり世あはれとて

より申旨抜まつてよあふとの

カマツ可麻久良のみりの清 相州鎌倉

仙光抄みりの傍い今の標哉あはまひ見安六

稲村が清と光と鎌倉と大藏冠藤と元あ

いことしは兵部名の谷や出城と鎌倉山

むごのまごうぐいもまもてふとれはむ若が各古小

出まはり トア奥儀杖 ト合のうはれと

武家のトト能あ

かこつ事のに替てたらきりとも

らたら葉の並立之和名抄の並の字と別也

拾遺集の物の名とよみはねがくしと信託

ハクイマ波由馬 驛ノ字 とのつわくご殿のあふ

ゆあまことしひまのうらうせあともあそひ

ひよ 夜 ころまもいなるの字ニツきト助信

ありこ山とてぬかりおひあまも人あつそふいしが  
川やうあーと ありこ山は雲抄に云ん人伝す  
按しる尾浪山と吳山カ

大食鳥 あまも 仙光杖に云つらるる云云尾浪  
草にまきまきとあまもト云ト云

不來而過妹

あちのほの可必の水素かよる湖の評はた受久

毛ウいりて称まき 欲霞ハ移んと  
尾浪山知我麻の庄

小や加家村は秘ま

人のうら田いしまき 今さうに國さうれそわれ  
いづません

いづません

死流さうれ 依地とさうとさうとさうと海なる

私曰は八重葎の飛もあまもといふま人のせ

田 又種子とあくじりの天津飛

事之有者 小泊瀬山乃石城尔母隱者共尔莫思

吾背

石城と云岩ま 一真廓也云云石隠といふも

人死して葬し るよといふ其考を考へた

雷龍 ツカミと訓してを神  
と云音便あり

豊後風土記曰 今汲泉水有蛇雷龍 詔於  
筒美 常陸

風土記曰新治郡 家名曰大神 於筒  
美 所以然

称者大蛇多 在因名 家名云 按しる 神代

卷之所謂之靈は是之字半は素戔之又天神之  
といひ山嶽小雲と起し雨と施し神具とカカラ  
カミといふもや

鯨魚取 イサナトリ

まき以風古兆曰鯨伏在郡西首者筋鯨追フ  
鯨走り來ル隱伏故云鯨伏云為佐云私曰りら  
とイサナトリと云り勿論カ但おナトリて曰  
かざる者も童蒙抄に成第云といふと  
けり是はいとふとといふも海の花説にあり  
小意とつけり

アマノハライハトリヒラキカミアカリマシヌ  
天原石閉開神上座奴云云

是ハ日並尊 草壁皇子 殯の時神ト人麿の讀方也  
天照之神岩戸と開りふといふ岩戸の隠其岩を  
開きぬと云神鏡とまといひ六神具と祭礼  
も日本といはる

宮柱太布座御右香乎 在香ハアリカ  
正殿アラカ 同

殯宮 トコシヤイハ 磐隠丸 皇大神の岩隠と思ひ

哭澤之神社 モリ 紀伊国 人麿毒依羅娘子 ヨサミシトメ

御遊雷岳歌一云主君ハ神トマヤセハ雲邊を伊

加土山ト宮殿い中母 人丸の宮

日本記大泊瀬武天皇詔チイサユヘノ子部連蝟羸曰朕スカル

欲見三諸岳神之形云云仍賜名為雷云云 私曰

神代卷慮く雷といふ考は云々云々

雷イカリツミといふは雷イカリツミと訓む

此ハ忿怒の神といカツチといふ事と云得(云々)

但イカツチ一ツチハ祖の云イカハ大綱(云々)

大神と云ふ事

詔許曾ノラハコソ中臣桂ノラハコソト云モ一但ノラハコソ彼祝詞

鶯與高部ヲシトタカバ云々鴨の中はたふと呼ぶもの云

年奠市アユチ紀州尾加と云ふ石

八雲抄云ははくは能行玉と能やと云ふ端のりう

あゆちがうのりうのりうの沖津と尾津は

のゆちりうのりうのゆちりう

栲タケヒ領中シレ奈麻余美乃甲斐ナマヨミノカヒ栲タケヒ領中シレ

赤緑流駿河能国ウチヨスルの大地まき尾津波のり

いづるが班鳩ハヤブサ一此采云云志めと云ふもの名曰り

寄物カマミ人ヒトの鬼オニ及音有ナリ人たまのあやとつくる

多知山タチヤマありと云ふ雪と常夏トコノエふんれと云ふはかかふまじ

たらし山タラシヤマ越中エチノチ立山タテヤマかかふまじと云ふは律リツよりあふ

立山タテヤマむらうムラウ果ミ所トコロ多タりしりシりリ母ハハあまてアマテ志シれぬ

氣比を神宮

大神宮のより仔細  
小かきしうらや

擬主帳

郡司の主帳並  
よりし人と云

あまけりしあのことこ 小の府とあのことこ云

海ゆりむ水漬屍山ゆが草生屍大君の故まを死

あちりのりまへせ

家持のあこ忠義の意こ  
人の信たる者かくまきま

わぐー恵ーまこ 神作巻二漆巻の二字とありことお

おしと讀

波曲麻 馭こ

仙光抄古友使のひて者よりあを誤と云誤語を

といまると讀む言を珍とありてそれと云る一を

誤りむま七つの珍と云く七はまの古友使一り

端七つの中よつハ朽ておける珍あり是と端たる

使ハたの者あよつけておけりまこと云傳り延春

式馭鈴傳箱皆納漆簾子云云林示和抄云復實

通俊云件鈴太有真物也或六角或八角云云

私曰我尾州中島府大國靈神社大鳴れ

鈴といふ古珍と古言使陽り日府と納一也

み川のりやめ草よりあつて

葛蒲よりあつてみ川かみあつて我まふとあつて

わよやの 佃鳥 アミトリ 子祝 ミツナ 始水 一三あまはりし和也

くしもん一屋中も掃一草花流り君と祝ふとあつて

仙覚抄主人の忠ありきしるはる三戸家の庭  
に掃つふ掃とんぼと云ふは古の俗今に於たり  
庭中此河須波の神ありてあれいも人ゆきま  
見毎小あまの神寛神足との神と云ふは本  
さうと云ふ金のよふ松木の葉をともむる云々  
さうと云ふ花さりの花と云 須良美久佐 野良と云  
りふよりハ顧り好くて大君の志この御楯と云ふ  
長今奉部興曾布ウ哥之敵軍の葉を楯とありと  
身よと家をもかりんぬと云ふ武人の戦場は身  
かくと有と云

ちと云ふ神の湯伝法のミミコト湯 味枝藍花内アヂサイノハナ

相藤原朝臣勝室九歳六月新令の年此紫徴内相と  
いふ蔵と云きて久池家系仲磨と任やい仲磨天神  
湯と稱せし後此は惠美といふ重姓と湯りし

と川妻は初子のりふの玉掃

後頼只は小玉掃と云ふと云市子日の松と門具  
してしるはるは飛りて三月初子日蚕養屋と云と云

右畢

○貞観以後天下諸社一同一階授奉年月  
寛平九年十二月十三日 天慶三年六月六日

兼曆五年二月十日 永治元年七月十日

○治兼四年十二月十日 元曆二年三月四日

私曰尾州勢田古本神名帳云文治二年三月

宣命國中諸神増階云云

建仁元年二月十三日 弘長元年二月廿日

建治元年七月廿日

○天地權護三十番神 二十八宿、歳星辰星太白堂惑ヲ  
漆テ凡三十番神トス

内侍所三十番神 第一雞大神第二大日靈尊等云々  
神代卷ニ見ヘシ神名志記トテ分統

玉城守護三十番神 青龍朱雀、四神寅申神、四神  
是又三十二神也ト氏私説

吾國守護三十番神 第一天神與比神第二高千火元  
弟三隼神子湯神弟金神弟氏

禁關守護三十番神 是天台家所謂三十番神也

○如法經守護三十番神 朔日伊勢二日石清水三日加茂云々

法華守護三十番神 大比叡小比叡聖真ヲ客入王ナ

私曰三十番神者天台家私享而卜部氏延為己家事

一笑呵ハ

○聖平記中臣氏三氏ト云ハ中臣ハ姓古ヨリノ姓ニ

吉田ノ卜部氏ヲ説キ常盤大連中臣ノ姓ト揚トシホキ

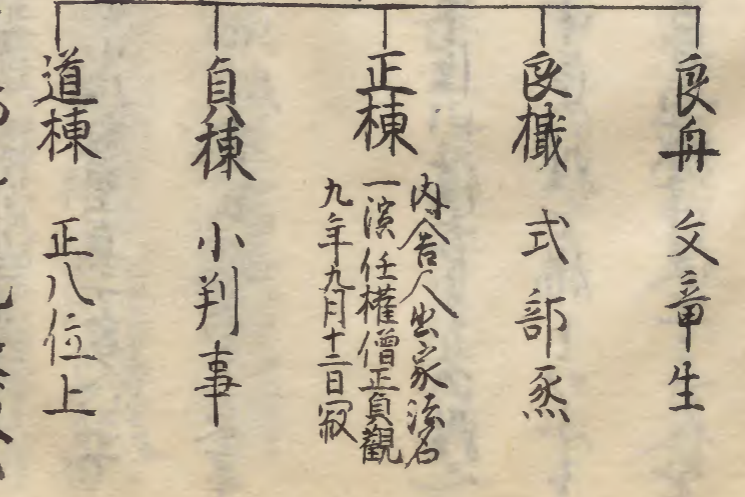
ニ松智ノ虚誕ニ仲良記トシ中臣爲賊津使主ト云人ト

哉トリ又吉田ノ卜部ハ平曆ノ裔ト稱シテ元治曆ノ

嗣平曆ト記シ或ハ元治曆ノ三男一濱法師の子平曆ト

書し其ノ非ニ平鷹ハ伊豆ト移して智治鷹乃  
流小北ト中長ノト系牒ト梅ト

中臣  
諸魚祭主  
智治鷹備中守



○朝野羣載永昌記中右記等ニ下部と亀長或ハ  
亀卜得業生と云々

正六位上亀長卜部兼政  
卜部系崇神祇伯從四位下  
侍從卜事セハ偽也

亀卜得業生正六位下卜部兼俊  
卜部系崇神祇  
大副卜記又偽也

右古記の所記新卜部氏大副小任セハ兼康神祇  
官年中仍事兼康ト云ハ王位任セ三代実祿

曰貞觀二年十月十八日壬辰遷正六位下神祇伯卜部  
省称平鷹階加從六位云云

い文ト依りて平鷹ハ二位ト叙ト云國家の説ハ  
是ハ平鷹ノ從リあるト云度舍延任ノ考卜部省称  
平鷹字俱當化橋朝臣永名續日ハ後記曰兼和  
十三年七月丁巳以從四位上橋朝臣永名為神祇



伯三代實祿曰貞觀二年十一月二十七日癸卯正五位  
行內藏及神祇大副中臣良臣逸志神祇伯自  
兼和十三年至貞觀二年凡十四年省之改任伯之  
父貞觀八年五月十日散位從三位橘朝臣永名  
薨云云兼和十四年伯貞觀二年從三位 三代實祿  
平鷹卒時從五位下見三代實祿文德實祿賴夏  
三代格等平鷹之叙三位且公胤補任不見平鷹云  
三代實祿元慶三年十二月五日尾張國中馮郡  
從五位下丹波介卜部省稱平鷹卒伊豆國  
人也云云為神祇官卜部云云度尊延經考曰

尾張國中馮郡六字衍文云云

私曰凡古記衍文錯簡在印行之際不考改  
故為世誤者許多見曰卷者宜參考他書誌之

卜部兼俱初名兼敏 室徒年中ノ名 應仁元年改名吉田家

記曰一條院永延元年十月中申ノ日行幸吉田社

可為社務之由宣下云云 一條院吉田行幸之偽說ナリ 永延二年以

大職冠御諱片字可置名字頭之由被宸筆以

降當流用兼字云云 一條院于收九歲空有以夏且永延以前有宮主兼延

安元元年六月十日所賜吉田家院宣

是偽字之具延經云考此時卜部兼茂八伯業資

王乃家司其子兼直資家王の家司あり  
資宗王貞応三年、託し出たり何を也院宣と  
賜ふまじし部系宗兼茂兼忠に侍從神祇大副と  
まじし皆偽安あり

嘉祿三年十一月廿日編旨

亦偽造之彼編旨曰神祇官以長上云云宝龜  
五年以來為御一流之重職云云及領の号と  
吉田家よまじし兼俱時が軍家の内奏よこりて  
之但一代よ渡れり由は神湯殿能く由宝龜六年の  
拾よし長上とらぬ神祇官のに字を増まし

人と欺く長上と云神祇官の被職ト部長上  
云の右のり嘉暦二年九月九日永和元年六月  
十六日等の編旨皆偽まじし呼ト部氏毎に造云の  
罪と花欺人と謾し別し初ま給旨と偽造とま  
罪誅之容へり

天下諸社執奏奉任延長五年聖断云云  
是偽証の者也延徒弁之

齋衡三年九月平曆政大中臣陽本姓ト部云  
是定小無智のり久大申信の戸ハ胡臣とよト  
部の戸ハ當時名稱よこりて之是二名と兼し

上社の姓と賜くんや又得之常とせんや且文徳実  
祿曰齊衡三年九月庚戌官主外従五位下卜部  
雄負神祇少祐正六位上紫基等賜姓卜部官稱  
云云是と云く平曆小治舍せり平曆ハ神祇官  
の卜者始卜卜部ハ中臣小治云々

長秋記天冠三年八月十二日の條卜部長上  
卜部兼改免後冠卜の制ハ分於本と記せり  
播磨河原の四村まで卜部全きものありしに對ふに  
の全師執事ありて鬼卜と勤由といひ今高家  
は鬼卜と例の偽傳と云へり卜部氏は從り任

セハ兼憑として支卜先ハ侍從某と兼俱する  
ハ皆偽友之系也中記云と偽小治云々ハ偽傳  
吉田家自家の先祖と云くせん偽て偽傳と  
託ハ相延と欺く罪と顧らるしや又諸社の  
神人ハ我許状と稱して凡ハ烏帽子符衣等を  
授けらるものと許して主人と云く其の守とまは  
史將衣ハ祭後ハ淋く且禮とのり上世ありて之  
に宜ふくして玉目の号とまはるるものと云く  
此にて偏利と貪るの我國礼世起れり又高家  
漫諸社ハ神号と授け神位とまはる其文

近江國栗本郡高野神

高野由岐志呂神

宜授大明神号者

今上皇帝 聖勅神宣

御表之神壘如件

文明十五年五月廿四日 神部伊岐宿称判奉

神祇管官願長上從二位侍從下部朝臣判

是の系俱り奉りて執裁しつゝしはし時處の神人

より今と云々神号と授り者多し之後吉田家

例とす

偽授神階状永正始欽

神宣肥前國代賀郡興賀庄

正一位與止日女大明神

右欽明天皇二十五年八月廿八日垂跡以来

代々被増一階勳年記為極位神者依神宣啓状

如件

永正十年八月十三日 神祇伊岐宿称判奉

神道長上侍從下部朝臣判

右八兼名カ偽授之け亦代々神階行多し

○宗源宣旨

○正一位足見田夜後大明神

勢州三重郡  
水澤村

右垂跡以来被増一階勳年紀為極位神者神宣  
啓状如件

元禄十一年十二月六日 神部伊岐省称奉

神祇道管領勾當長上正三位侍従下部朝臣兼  
古今吉田家授一雨の状我々礼法の所必也  
今日昭代の政とありまはし私神位と稱するも  
于座の重なりて是は神位と稱するも  
多田河及壺井等其福近年正二位勳授  
宣命神位記大政官府百司記之人是と

○吉田の折賦一熟人

○職原抄二卷正平二年十二月一日拾九年系左近衛權  
少左源頭統所守古く寛文六年六月權外記集人云  
某重守一のおぬ今伏系家記あり又長  
十三年所守古く同く印の事いふ誤り

○災徳國推加納大井戸加納東濫十

梅止るは加納八系の中厨おといふとく公役は付て  
の是稲並ハ昔公田の中倉前日並もけ教さるは  
ふしは有雨の是王政廢れて後い古名をかか  
るは

○或同久松氏の友家苗裔として尾州智多郡河古庄の邑の産久松源三左衛門は定源の孫今源氏と稱せ是に久松因幡も康元等 久松若の父兼ありは源の姓と稱せり予曰名此は定の玄孫れ系進定氏男子か一久一也満負二男といひて母死一家を造一め一也は是耐詮定といひて子範備又久松氏ア大補と稱せ 康元詮定七世休渡も定俊子之此詮定以来実一清和源氏あるもの之

○又奥平氏の父玉堂として平氏ありと申す此はよきと源氏と稱せりかの祖赤松則宗の

二男氏の丹方の族児まは備耐宗の養子となりてその末流上久奥平源一守せり平氏と稱し奥平茂光ともし源氏兼おはは源氏之流行候理兼義隆

○岩城定隆の男源三左衛門の休行は平氏ありと云定隆は從三位九中は義直の弟として岩城の由子とあり候は義隆の姓平と稱せ

是等の數多ク係系等と改むべし

○庄司源氏の事 是は中世より出雲より庄司は性善院院法主長官等より補せり下目藏之たとは尾州志紀郡として郡古地庄司は廣井村

榮村海橋と云々一之流は庄園所係後世は  
事之文治の始と護藏と補正園の係と地次と並  
し一より古のまうに於てありしに於て後庄園の  
号とありしを白目社とありしを補正とありしを  
榮田田為家とありしを明親王とありしを蔵治りしとありしを  
山老とありしを

○台記曰攝政者天子所授長者我所讓無有勅  
宜云仰可取出長者官渡券朱罌臺盤權衡  
等事之由云云

梅よりよの長者は尚所宜下次今閑小為

源氏長者より宜言又梅よりよ朱罌臺盤と

氏長者家の饗罌ありの今世に度用之

是後世古記と失せり

○二條道行奉 寛永三年 九月六日 前日儲御所大殿祭祭主

神祇權小副大中臣朝臣友忠勤仕

主殿寮供常燈 本主寮法燈臺調進

掃部寮設小羊思旦葦公寺

中宮女進藤原長信 天野豊前守 藤原親次 大橋秋後守 二人也

狩衣 沙 下襲 唐 指貫 同

御隨身六人 武家也

冠如常

裾

汝汝縫物

衣

唐綾萌葱為汝  
雁金有妻

袖單

赤地金淵  
泅大帷

袴唐綾

石帶

絲鞋

元徳奉公御下皆一日晴お東也尋常格式と具

○亡盲者の傳は光孝天皇の皇子雨夜皇子明と矢

はまも一附の世の元盲と悪田と至て主の盲人と

悪の

いっしー上加茂村境の地  
その田作りしと云い

又或年

黒谷上  
九老傳  
光孝帝

○の姫君玉判加陵風苦といふは是江口祇園

室之原等の仕君の遺跡也或云八人の皇女と

七はよ奉一て君の名と海ふと傳ふ按光孝

帝の御下御子の皇子の御下はまもりといふは是江口

天皇孤獨の病臣と悪と云くは田と云て悪の

と後世にやまりて皇子が姫君といひは傳

あるべし姫君と延在帝の皇子と云ひ又を合の

祖といふはけ教うと云又を合は非田と云れ

之れのと云はりも云いといふは傳はる也

○イフセ一り葉馬音降音と云はるは抄のわぬある

いふ又邑憤イフセの字或は本音の字と云はるつりある

と云はるは抄の抄はまの御下ありと云はる

又桐壺といふはまといふはまにまといふはま

賢木の抄といふはまといふはまといふはま





時くわりのりやふも瀧一兼元永年正月廿日  
印希れ酒造りなる延奉等はと記より是古  
の敬奉よりてこの精ふは事起り足利家の  
時式定り侍るや

○秋奠秋葉は同一としるや言礼は於て恒重のり  
秋奠は牲幣として一秋葉は額座として孔穎  
達り正等の弁詳之

○鉢梵王の食普は三種より石神は佛益法神後普  
木鉢は和風の飯普あるより秋氏のまはるより是  
は天竺の風俗といふは我國隨處の案ありと云

於て西土の風と判ひあんと思ひんかてふこと或

○僧より又仏像のよま彩の糸とかくる事天竺  
の佛は仏像れたよま彩の情てりは法王よ  
條は人のたのよま幡の飾と云はれ又密教

<sup>灌頂</sup>  
<sup>経統</sup>の中は仏形の年よまをたけりは老のよま  
はるゝ意地と行ふよりればはるち陳漢のよま  
はるゝよまはるち新和と求りてはるち射て

念しるよまは必像の臂時股膝は繩とわけてはるち  
南は業師すは景戒法師所述の吳吳記は我  
より是皆佛力の増法と依りて接てはるち

念之今世其像れ御帳ありて善の徳と呼ぶを近  
 縁と造りて善と化せ之とあり御田神  
 此の世の御神樂に江の長き組流二條とかけ  
 尾浪氏人及神人率てまゝなる石法あり  
 神音とまゝなるしこのまゝと稱せ日の神徳又此の  
沖つらきと云い  
 ○シホロケ小縁 塩農等より  
かきませり 無明 白氏文集  
け字と訓と 源氏末稿の  
 抄よと傳りけおきてもいへるまゝと云ふ所の  
 字の字ことなり

○イカケ沃懸 源氏拾遺  
の枚也 按するは湯のまゝと云ふ  
 じるとイカケト云ふまゝ又沃懸地をカハ前法と

○ソリとれバイカケかまゝと物と傳りひらと云ふ  
 ○源氏ノ灰とちりけと云ふけとまをり身といふけ  
 ○はるおといかり湯又ハ塩のまゝと云ふ編よ  
 ○つらとれハ

○神祠の茶椰子と並 暮あし  
又あり 於門ハ天祿御多と  
 並用武の地親縁と画キ碑頭具八負と造り霜  
 下と撞上の紐と 後祝と佛座より 好聖  
故 控  
 行と獄舎の門ハ画キ睡毗と刀上ハ彫刻物と因字  
 浅胡琴 見世  
あり の上ハ刻ミ嘲風 好險  
走 殿角ハ造り  
 虫吻 好家  
と 教育ハ室お多し今け等の款と志

らび一ノ獅子と云へる人多く〜と云へて可也  
 ○梅村裁筆曰天台詔傳左槎芒繩縛鬼子用  
 左槎打繩要縛鬼士道家語法術也正宗發自法我公  
 端出繩左槎  
 と有るものハ吳邦の家  
 の傍に〜と云へり

重出ノ分名目

- 我ハ吳邦と通高〜と云一條先文才
- 新葉集撰者と云 曰才
- 清和天皇貞觀年中行事ト云 曰才
- 高野山省住僧都と云 曰才

- 六條天神社解曰と云 曰才
- 庚申の事トと云 曰才
- 橋の字 曰才
- 平岩氏と云 曰才
- 大坪乃禪ハと云 曰才
- 馬鹿云ハ一條流と云 曰才
- 蔡色獨函曰と云 曰才
- 芝長ハ老ハ多ハと云 曰才
- 浮屠家詭佛鬼の法ト云 曰才
- 大坂の役ハ天樹院ト云 曰才

○里邊の浦星の社ハト云

曰才

○清人平氏、童七歳ト云

曰才

○池田に信守信輝入ト云

曰才

○禁秘抄獅子狛犬ト云

曰才

○細川玄旨ハト云

曰才

○諸山守弁様目ハト云

曰才

○保元物語ハト云

曰才

○尾張津波に家ト云

曰才

○杜の字

曰才

○伊勢の子良麻呂の齋ハト云

曰才

○紀州於智の比丘尼ハト云

曰才

○伊勢上人善光寺惣田上人ト云

曰才

○和久南ノの曼荼羅ハト云

曰才

○或問錦の垂垂ハト云

曰才

○金剛草履ト云

曰才

○科簡の字

曰才

○我公弘法大師ハト云

曰才

○或問神を神作也ト云

曰才

○後と使止らぬト云一條

曰才

○古(四天王)ト云

曰才

○或問流茶房山上云

曰才

合三十七條

○右に介は塩尻二十七中ニ交り出を重む之仍る名字

○塗之

○天明八年戊申三月

多岐常政誌之

○塩尻卷才七終

○塩尻卷才二十八

日迅

○三法元の時始るより楊升菴より君子深居と

○小くむ小人却るこれと流るるを今三法の

曲と多しといふ多くは婦婦優人のいさなり

○今我邦神家曰無上灵宝者道家之言也按經

籍志呼灵宝道經二十八部如太上灵宝護身

符籙靈宝祈謝天神儀靈宝守宅存儀是也又

○按以大上無上亦出道經矣

○春秋内事曰日者陽德之母也





○信景按本朝以日神配女魀固有故

○淮南子曰月天之使也

信景按神代卷一書說日神以月讀尊遣下土蓋取之

○文昌雜錄云軍中以端午走馬謂踏柳

信景按秣邦競馬走馬是也

○秋名云吐也吐生万物也

信景按神代卷有此意

○自伏羲畫卦而易之道著文王為彖辭周公為文辭孔子為十翼而易之道始備秦火以下筮不廢

唯失說卦三篇後河內女子得之漢初言易者三家

其一則始于田何之十二篇以授丁寬再傳而得魯

之孟喜齊之梁丘賀其二則始于焦延壽而陳郡京

房受之其三則始費直而鄭玄王弼皆倚自是費氏

興而田何遂息至唐孔穎達作正義獨取王弼之

學季鼎祚之集解則取鄭而捨王陸德明之釈文

則宗京而尚教及采程子之傳朱子之本義出而

後理與象兩明焉

○三明劉敞曰天子諸侯皆三門而名不同云云

信景按淳熙氏以寺門稱三門者僭也

○或曰般若三藏所譯功德王秘密陀羅尼經曰天  
照喪圖吾稱曰神号天照太神蓋依此經之意平曰  
子言柳未也周易象傳曰登于天照四國也是  
孔子之言也豈取於後世異端之書然モ我天照之倭  
語者阿摩津天流於保比留米乃加美略語ホヒルメノカミ本最  
異邦之熟字

○元祿庚辰二月七日尾城不災之市民の家千粒皆  
十二年  
戸焼失傳ハ或も火此近き浅思ハ付カて  
擲ハのカ家ハ遠りハ此釋り火面て寺モ恙あり  
於後日とありて此ハ付カてハのカ家ハ千粒皆

次の月七日を以て俄に火災して悉く焼ての付置と  
記すハ此の傳り凡の國のりハをハ此ハにハなり  
てハのカ家ハ遠りハ此釋り火面て寺モ恙あり  
とかくもりて此ハ付カてハのカ家ハ千粒皆  
よハのカ家ハ遠りハ此釋り火面て寺モ恙あり  
もと心ハをハ此ハにハなり

○葉隆礼所撰遠志曰契丹之始中国簡冊有所不載  
云相傳有男子乘白馬浮土河而下復有一婦人乘  
小車駕灰色之牛浮漢河而下ハ遇於木葉山ハ顧合  
流之水其為支婦此其始祖也是生ハ子各居介号







いづる云よりいづる

○神と云ふ事と云い何の事より白和舟と云事の  
葉といふものと云はる本之永久勅使能外宮律子宮百  
称直室取資本二枝謂之玉串内宮取玉串二枝といふ  
○長者言<sub>二</sub>玄士大夫當有憂國之心不當有憂國之  
語二三子記此語夫國政不是誰不憂之乎然不其  
職而言之者<sub>二</sub>母之君子<sub>一</sub>於口之出納唯謹

○知世人所憂則知顔子之所樂矣 集氏筆乘

○竹村流<sub>二</sub>入道<sub>一</sub>たを信教を改を信より信入<sub>二</sub>何の事  
に信り<sub>二</sub>たをせん<sub>一</sub>と信し<sub>二</sub>けり<sub>一</sub>の上を止めん

とてお家志<sub>二</sub>あひ<sub>一</sub>たり信流<sub>二</sub>たを信<sub>一</sub>けるを其心

あひして相志の望おまを<sub>二</sub>たり<sub>一</sub> 茫然無

竹村流の<sub>二</sub>入<sub>一</sub>西園寺の公衛<sub>二</sub>まを改<sub>一</sub>信一人の

師範に海の儀刑あ<sub>二</sub>れ<sub>一</sub>るを<sub>二</sub>任<sub>一</sub>是<sub>二</sub>友<sub>一</sub>非を

え<sub>二</sub>たり<sub>一</sub>と<sub>二</sub>して<sub>一</sub>ら<sub>二</sub>む<sub>一</sub>じ<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>い<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>を<sub>二</sub>世<sub>一</sub>人と探ふ

よ<sub>二</sub>及<sub>一</sub>して<sub>二</sub>時<sub>一</sub>の<sub>二</sub>窮<sub>一</sub>より<sub>二</sub>の<sub>一</sub>位<sub>二</sub>を<sub>一</sub>友<sub>二</sub>と<sub>一</sub>ま<sub>二</sub>り<sub>一</sub>こと

高村西園寺に北条家<sub>二</sub>親<sub>一</sub>と<sub>二</sub>り<sub>一</sub>て<sub>二</sub>友<sub>一</sub>信を<sub>二</sub>信<sub>一</sub>

任<sub>二</sub>し<sub>一</sub>け<sub>二</sub>り<sub>一</sub>と<sub>二</sub>ん<sub>一</sub>とい<sub>二</sub>は<sub>一</sub>れ<sub>二</sub>る<sub>一</sub>に<sub>二</sub>一<sub>一</sub>兼<sub>二</sub>久<sub>一</sub>の<sub>二</sub>運<sub>一</sub>礼

の<sub>二</sub>信<sub>一</sub>と<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>を<sub>二</sub>親<sub>一</sub>の<sub>二</sub>中<sub>一</sub>の<sub>二</sub>志<sub>一</sub>と<sub>二</sub>り<sub>一</sub>て<sub>二</sub>事<sub>一</sub>あ<sub>二</sub>ら

か<sub>二</sub>る<sub>一</sub>お<sub>二</sub>が<sub>一</sub>所<sub>二</sub>と<sub>一</sub>信<sub>二</sub>道<sub>一</sub>と<sub>二</sub>り<sub>一</sub>て<sub>二</sub>に<sub>一</sub>海<sub>二</sub>の<sub>一</sub>儀<sub>二</sub>刑<sub>一</sub>と

あり一度王はとまらば有る心なく浮屠氏  
 とまりて法華ののれをいと持て流定権を  
 けしめられざりしと其心をまじりて  
 室六いふ人ともむねなるいふてれはる兼好元か  
 乃と知る者よりいふ噂のくまて友直と合する  
 とのこころと長ひありて捨世の友とまじりて  
 ○柳若まはるすりかゝるものはあら物と應て作  
 ずしむし但或人の信受は豊三守横三守はれ  
 ころかすけいの本教冷泉がふはして重と用て  
 三業がふ言事と平と夫の西の十重とわいし

むふとく柳若相かといふ柳のむきもあまつ  
 候とていふはとつていふの今いあて松と用ひ  
 僧が柳屋の柳をおいといふはとつてはる観音檀那と  
 文之冠とともしと釣みんとともなる

○不以道得富貴不處

嗚呼我人逆事と忘りてつて楊権のこころと  
 亦代の鶴儒と非やま始に字と好むくせんく  
 智利と悟りてはるは漢ははして三世高は信し  
 久王莽よつてひて法をたれりらも堅む  
 いらいなり莽帝号と名稱なるは権自是の信と

ありて遂に大史よりして其新の叙の辭を以ては婦人の淺きこと也  
今庸謹厚の士といふこと一及豪傑奢華の士といふ  
名奔利走の名に接するは其素行と久しむる  
者哉希之況や君の恩顧他は失ふこと固く  
と志しむるは後よぬ人の建功立業の志のこ  
とあるも其始の志はいつとあつたればとも  
つゝい程すのなと做ぬれば志と事とのま  
るる学老たるは有るべし新あり

○我教公薨前有人献一鋪古墨跡其文曰天五士是天  
教之五生士之謂而讀者以為天五士天興一代  
倭音近然公次年五十一而薨国人以為識焉按采  
張端義貴耳集曰本朝年号或者皆有識緯  
於其間大平有一人六十卒字大宗五十九而上仙云  
可謂異域同日之談也

○同集亦曰天聖曰三聖人明道曰日月同道清康曰  
十二月立康王嘉泰曰士大夫皆小人有力者嘉泰寺  
異邦折字而相之術皆識變風也

○王摩詰集天寒遠山淨日暮長河急  
○或人問俗同信云必領童子其附代いつ比や



といふ人なり曰是武家権と失ひて始り  
○東山殿政はよろより後細川山名氏権が次第  
師東山に討死し年を歴く後ひては武家の  
士卒情稍よつれ遠近の里に押入ひて美由  
根と推取あんとしてまたのち多しう武家人迹  
まれりて農高業として一村一落あり一揆と  
結ひ用をせしそ始りて岩洞川軍中死て戦士  
皆をいかり程歎をよりすよけりて又いして  
我は浅きも戦中とぬる民の積業と別れり  
程多し一氏始りて村を散りて居り後六

武士の僻き小習ひて若く是と結ひて盗と  
ましきハをとりひて土地は奪ひたるも又  
てこの一揆とての一揆とあり起りありり  
應仁以後の礼のときより上古とありけり  
記録悉池之由家の故実とすはたかぬ  
凡信ありひて人人心をほりてあり

○魯三家原始 依或人之需記之  
元禄十三年  
庚辰六月二十一日也

問昔魯國弭三家有テ驕僭不臣也所謂孟孫  
氏叔孫氏季子孫氏也然季子氏庶家其疆益  
增何ソヤ答私古記按スル魯初伯會ヨリ十五世

ノ王桓公齊襄公殺サレシ後莊公立テリ莊公  
黨氏力孟女任受ノ子班ヲ生シム

子班長メ梁氏ノ女ヲ説ヒシ園人榮ト云者ヒソカニ

彼女ニ戯ルヲ觀テ怒リ榮ヲ鞭ツテ有後榮班ヲ

殺モ故アリ

莊公三人ノ弟アリ長ヲ慶父ト曰フ孟氏カ次ヲ叔牙

ト曰叔氏カ次ヲ季友ト曰フ季氏カ是ニ家ノ祖ニ然メ

莊公齊國ノ女ヲ娶リテ丈夫トス哀姜夫人子無シ其娣ヲ

叙姜ト云ヒシカ幸セラレテ男カヲ生ラレヨ子開ト云系

啓ト云漢ノ景帝ノ諱ヲ避テ史記ニ開ト記ス 莊公其本丈夫ノ子ナケレハ子班子開也

這嗣ニアラズ其上莊子孟女ヲ愛スル故コトモ年モ長

セシカバ子班ヲ立テ嗣トセント思ヘリ然ルニ莊子病ガリ

卒セントセシ氏弟ノ叔牙ヲ呼テ世子ヲ立レヨトヘリ

牙カ曰魯國昔ヨリ父ノ跡ヲ継モアリ兄ノ跡ヲ弟ニ

及スモアリ慶父ハ君ノ次ノ弟ニ嗣ト為ヘト云莊公ハ

叔牙ガ慶父ヲ立ントスルニ患ヘヌ季子友ニ問ハレシニ

友カ曰班ハ君ノ子也我子ヲ以テ班ヲ立ント云莊公

曰先キニ牙ガ慶父ヲ立ント云ヒシカバ是ヲ如何セシ

ト季子友討ツテ魯ノ大夫鍼季ヲシテ鴆毒ヲ飲メ

メ飲マシメテ殺シ其子ヲ立テ叔孫氏トス



杜氏曰罪ヲ以テ誅スルニ非ス故ニ後ヲ立テ其禄  
ヲ継シムトイヘリ

既ニメ<sup>レ</sup>莊公覺セリ季子友昂チ子班ヲ立テ魯公トス  
然ル所ニ慶父已カ立サル<sup>ト</sup>ヲ怒リ圍人榮ハ初子班ニ  
恨アル者ナル<sup>ト</sup>ヲ知リ彼ヲメ班ヲ殺サシム季子友カ  
タラス其難ヲ避テ陳ニ走レリ慶父自ラ位ニ昂モ  
サスカナレバ先莊公ノ次子開ヲ立テ君トス是<sup>レ</sup>閔也  
史記 慶父是ヨリ驕リイヤミシメ莊公夫人哀姜ト  
記 蜜通シテヒツカニト<sup>レ</sup>齧ト云モノヲメ閔公ヲ殺セシメ  
慶父自魯トナラント計リシヲ季子友コレヲ聞陳ヨ

リ閔公ノ弟子申トヒニ邾ノ国ニ往テ兵ヲアケ魯  
人モ亦皆慶父ヲ誅セント欲スル故ニ慶父國ニタマ  
ラズ出テ莒ノ国ニ奔レリ季子友昂チ子申ヲ奉テ  
魯ニ入り君トセリ是僖也 史記ニ 季子友莒ニ往テ  
慶父ヲ求テ斂リ人ヲメコレヲ殺サシム慶父後ヲ  
孟氏ト云

以此見ルニ叔牙先ニ殺サレ慶父後ニ害セラレ独  
季子友公室ヲタスケテ功アリ故ニ僖公コレヲ立タル  
悦ヒ汶陽ノ鄆ト云地ヲ以テ季子友ヲ封メ相ヤス  
僖公立テ季子友政ヲ專ニス故ニ其子孫強大ニメ公室ヲ

無セシモ是ヨリ起リ其後僖公薨シ文公立テ子有  
長ヲ惡来ト云次ヲ視ト云次ヲ子侮ト云ヘリ又公薨メ  
子侮公子遂ト云者ヲ史記三仲頼之齊國ニハカリ合テ  
世子子惡ヲ弑シ侮自立テリ宣公是也始季子氏  
僖公ヲ立テ今遂宜公ヲ立ツ故ニ權柄皆臣ノ手アリテ  
君ノ空名ノミ以此公室日々ニ卑メニ家年々ニ疆ニ宜  
公彼ヲ去レトセシモ不叶メ薨セリ成公襄公ヲ経テ  
昭公時ニ家ヲ滅サレトセラレシカ事不成而却テニ家  
公ヲ伐ツ遂ニ公由奔メ後他國ニシテ卒セリ魯人  
共ニ昭公ノ弟采ト云人ヲ立ツ定公是也ニ家増

盛シ也定公薨メ哀公立魯君ノ國政ヲ失ルル久シ  
孔子ハ定哀ノ時ニシテニ家驕僭ノ日也論語ニ家ヲ  
云ヘルト多シ此レヲ考ヘテ其時ヲ知ルベシ

○宋ノ国子司業其崇義力所著ニ礼圖ノ曰冕  
云云古ヘ天子ノ冕服ハ十二章王者相受ニ至周而以  
日月星辰畫於旌旒所謂ニ辰旒旗照其明也  
而冕服九章云云冕服皆玄衣纁裳朱鞅素  
帶朱裏又以朱縁終禪カミ アケロノモ アケロハシロキ云云

信景按冕服之也此書謂之評也凡初問識者  
而無知之者幸今繙此書得之權遺忘耳



ルもの二首れつとまりて送<sup>ソウアン</sup>りルとせ

○ 又これ其の光りしるまのまを賞う

沖は浪言瀾いしりま多程に位浦の管やと

○ 糸子ノ多クハ慎ノ字無<sup>ニ</sup>是孝宗の殿諱と避て  
之我ハ文字と字はる人<sup>ニ</sup>は字のついと忌<sup>ニ</sup>糸子の  
本と講し人先<sup>ニ</sup>るものと志<sup>ニ</sup>るまうし

○ 亭景空 長亭短景無人益

老海節節 老大横挽瘦行節

○ 晉雲暮 回首新雲斜日暮

○ 江難峯 曲江倒蘸小山峯

一夕話

○ 讓と謙と固<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>て淮南子<sup>ニ</sup>所謂  
蒼吾繞<sup>リ</sup>義妻<sup>ト</sup>我<sup>ハ</sup>先<sup>ニ</sup>讓<sup>リ</sup>續<sup>ク</sup>物<sup>ト</sup>志<sup>ト</sup>所謂  
黃公<sup>ト</sup>己<sup>ノ</sup>女<sup>ト</sup>謙<sup>シ</sup>て醜<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>嫁<sup>リ</sup>る<sup>ニ</sup>ま<sup>ウ</sup>る<sup>ニ</sup>  
教<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>偏<sup>ニ</sup>愚<sup>ニ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>

○ 尼丘之山三倉合而為<sup>レ</sup>屈<sup>音</sup>屈<sup>音</sup>章之水後人合<sup>レ</sup>而  
為<sup>レ</sup>顛<sup>音</sup>律

代醉編十二よりけ教は多<sup>ク</sup>又秋の字穂と  
夫<sup>ハ</sup>非<sup>ズ</sup>也本字<sup>ハ</sup>穂<sup>ノ</sup>字<sup>ハ</sup>ある<sup>ニ</sup>より又揚<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>揚  
は<sup>ハ</sup>子<sup>ト</sup>志<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>揚<sup>ノ</sup>字<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>

○或人問隱士石川玄号曰山窟隱居之地有山嶺  
凹凸故所名<sup>ル</sup>歟曰不然丹録畫記云張僧繇畫一乘寺  
壁望如凹凸近視則平名曰凹凸花俗呼一乘寺  
為凹凸寺<sup>ト云</sup>夫大山退隱之地我洛良一乘寺村故名  
之云

○本朝以西城之神立祠祭之者若牛頭天王社辨  
戈天祖吉祥天社妙見社等是也以漢土之神  
立祠祭之者若山王社等是也以漢土之神立祠  
祭之者若山王社赤山明神新羅明神泰山府  
君等是也我邦人以是等為素戔嗚尊為大

己貴命為倉稻魂之類甚多矣以天照大神為大  
以八幡為弥陀類則人皆知習合家作為之而不  
辨若牛頭山王等異邦神而以我國神率附  
之于本地垂迹之說<sup>ト云</sup>為表理也若大加富士住吉等  
者本朝地祇也然諸国立其社祭之<sup>ト云</sup>豈不異邦  
之神而亦非礼耳

○太神宮の千木望魚本心御控等ハ神秘口訣  
して他家<sup>ハ</sup>勿<sup>ク</sup>り<sup>テ</sup>も能<sup>ク</sup>の<sup>ル</sup>但<sup>シ</sup>延曆久津宮  
儀式帳上樽風群牧<sup>長ニカスル</sup>抄本別端以金  
飾云然延曆<sup>ハ</sup>前<sup>ニ</sup>令<sup>テ</sup>の<sup>ル</sup>飾<sup>リ</sup>の<sup>ル</sup>云<sup>々</sup>

一、神宮雜事記の流、後朱雀院長曆元年此  
勅を聖徳太子の鹿野木ノ左大踏イシアヲリ江澤板左右  
鞞掛端等の金物等被奉加糖リツといふ加の字を  
弥初より金の糖といひしをいれ侍御上右  
質素の高造りいりてかゝる華美の山とありや彼  
寶基本紀等神宮の四荒種々の流とて其造別を  
神秘より本、後世造高の別と是りて後、他方  
物と象とたりて造り華しむるおどろあきあは  
さしとて原木源カトと聖石の權化別別四  
生の表示ありといふも字唐氏の祖より豈取

是、人々の心の沖に極て深秘を心沖に記に謂  
而蓋稱辭と云くまゝとて一、其神社本源の  
心の沖れの篇、沖法住記を極て説と云く  
このことは、造りより上右のやと云く六  
つ、び神千木豊受御銘記を云、綱目利上謂  
千木利下但目利下謂、傳利下云、是則、代草嘗の傳  
風の端と云り、木の生を指しておぼひた  
と云、後、古風、ねが遠中と云、ん、い、と、い、  
は、先、傳、聖徳太子、又、聖徳太子、の、生、を、因、り、た、具、  
今の信草嘗のありといふこと、い、と、い、ま、い、と、い、ま、い、







○ 壬午川邊より壬午川に懐入るとまてらふ一ノ扉を奉り  
ふりよりの言をよむれば成懐昔余らひのふりよりの  
ふれば二睡の夢を記して今も夢のつらさをいふ  
世へ過るといふ所は悔や来或うや或ハ悔て今  
にいませむものよけいれとまてらふ心胸使回すもの

○ 山城の國稻の社

○ 一ナリ名義説く不同や按考す稲依比女命矢歳ノ  
神の子蓋一ナリ、一ナヨリの傳説あり

○ 名古屋元重(某)尾州愛宕郡古渡村人その父細  
源重(某)曾仕森五藏守移居于濠洲兼山天性

美藤而治谷自言且好武藝云輕率為行一旦  
武藏守欲殺某臣某氏而使其遺他次將刺  
于路名古屋氏請曰願使臣擊之則武乃以其年  
以且質美<sup>ナリ</sup>惜之不許名古屋氏再請之不止於此  
竊<sup>ニ</sup>屬一勇士遺之名古屋氏独急走于某氏闕  
于路殺之然名古屋<sup>モ</sup>亦蒙庇而免始名古屋於  
尾州領五十母貝之地云

是往日所聞沃井楓軒老人也按維新府志以名  
古屋氏為涼師藏場男風之始不知孰是固云関  
東小者本伊達氏某僕在東北而游使於曠野時

之稱伊達小谷以治谷游使者曰大天以彼之風也

○火法四座人の松見寺小本也此比立尼の像立尼ハ

合澤我後も頼付の廿うて是科積は字津真氏の

後書三の氏れ  
徳也後出衆して著尼とい如大禅師と号

セ一之始松見も名と流して位付付十夜洞小

下りあを汲つ時桶の底脱落してあはれとを又思

れとして入懐ひけり初秋二首と流せ

イちよのぶがいさぐ桶  
と一かくしたるこ桶のを母てあなめ後月とをい

後川鎌倉より松光酒師清く又京師入して聖

一酒師と奉せしと云々名とをいけりといさぐ氏れ

後舟はあかるとい

鎌倉志千ヨ城陸奥子本番盛子合次我後

取付の室とある

○壬午の二月の初夕暮一南よ白氣とて今こんり

いといえ一星まよして星と山は流れて三より再夜

よえ下りる物とあはれはつた又はけり上りの物日

ニツかひいあふりとも今かえりてえりてあやま

まよゆと見えん一とていへり一実と曰臨二ん一

南の方向雲の角小落くかゝるくら半暗くして後の雲の

方だ形消して白雲虹の如く流りて是てやうせり

引くもふくむも日影はうつろひの心かたしめ  
 首のうしろのよき髪はしつゝも青吳のたがはせり  
 ともまきり末世のいさむらとてははるく人の信らるが  
 ○或人のいさむら鳥のやまをよきとていふ亦人のまき  
 とまはるふもよきとていふははるく人の信らるが  
 鵲ウイカとて度瀬上剛々もといふしり剛々いその者亦人  
 といふ鵲ウイカの度音は鵲ウイカをいふ鵲ウイカをいふあむといふをのれ  
 枚種ウイカのうらうら草の集解ウイカなり

○倭俗以三月三日為海潮盡期按留積霏雪銀云  
 海扇海中甲物也三月三日潮盡乃出然則魚

異邦以三月三日為海潮退盡期

○沃野とわらうと和訓もなまもまの考を以て考れ  
 いたむらうらうらびり意姑いふくあひらう

○装束指掌図ヲ字ス如左  
 物衣帯并衣冠ノ款活

上申高卜高堂上世下の品とのつらたは雅ひしゆ  
 大信と初衣参後のお帯かたはハシの志り裾の長  
 きみしるまは後の人禁をゆりお帯いふんまうり  
 けこりまは公卿の位位の侍従お帯いふハシ  
 のかこひお帯文のいふはははははお帯志り

毛庭をまき上地をこつらうにぬるは庭のまき上地を  
つくぎうらまふはゆふと古具をさしむ。能く志りこり  
かゝる帯、禁地ゆるい花への枝。花への中麴塵  
のうの衣キヌをさしむ。後の中の極簡。ははの極簡ワキケケ  
左右府遠(きつ)のに府の友人。指黄の汝はぬらひ  
又禁地ゆりしやのうの人。指黄の織色をば老後  
黄あはぬのつらう志か

○着雨次方

先冠 懸緒 次赤大口 次襪 次表袴 次大帷有夏冬  
中浅單 次裾有夏冬 次恒袍有夏冬 次石帯 次釧平結

次笏 次浅履或は

△正従一位

正一位者混立し人の叙之従一位或持関或大臣或前官

大納言叙之

椽袍ツルハ正曆以來元元之大臣若夫依家依家

△正従二位

年勞大納言叙之或持関叙之或大臣或二位、中将中將  
袍同上大納言以下文或樂唐草或輪無可依家例

△正従三位

三位以上是公卿之位也伯云参議亦叙之或三位中将

有之 袍同上 参議若雜為四位是公之故袍  
下龍表袴指黄等同

二位以上下龍表并表袴又指黄有文地下三位者有

社家袍也同右但下龍表表袴指黄は後之文也

雜然或指黄或清花ヨリ池領而用有文ヲ云ク

△正從四位上

四位以下初位以上惣テ云諸臣但四位参議若公卿之

列之亦四位中少将若人辨官少将侍從皆堂上之

袍同上正曆以來以上一同様の也之又下龍表袴

は四位以下堂上地下一同之文之又指黄每文紫系

緋白或は紫系系結之地下見左

雜位は衣ノ子孫又藏人皆此禁也故中龍表袴

指黄等と同所自文地下の位位若外記史或諸

寮諸自友人又社家之袍下龍表袴同右但指

黄は淺黄平袴之

武家凡雜中少将侍從版石等利は紫指黄淺黄緯

△正從五位上

或少将辨官藏人少将言侍從若侍從叙之是

堂上之

袍能下龍表袴指黄同上

雜五位德禁也之人又雜人之品也  
同上但袍也用雜地下之袍也外能史或諸寮諸  
司官人又社家之或依之人叙四位之袍也同右之亦同  
△五上武家元諸太又四位其指其淺矣未終

△正從六位上

六位藏人亦地下之諸司官人叙之  
袍縁無文六位下也之衣也衣袴指其同上  
雜六位藏人其衣衣袴指其同上袍也八用縁  
其中極福、麴塵、袍著之是并依の由也  
地下之亦能能諸司官人又社家叙之

袍以下同右近代武家之人不叙六位

○輻輳故事

後土市川院治應九年、唐市川院妻後の日あり  
う、途葬の申海あり、其極<sup>キウ</sup>い、つ、内裡の  
戸、重まり、の尻、は、十層、漸、よ、て、泉、涌、寺、の  
葬、り、ま、り、と、り、や

後柏木院踐祚まし、て、より、二十三年の後、大永元年、こ  
御即位の礼と、い、は、る、も、し、又、貢、税、ま、り、延、川、せ、り  
西三條の實際、是、を、想、心、お、祈、り、の、信、業、院、願、如、し  
淺り、費、料、と、て、う、め、お、し、り、あ、れ、と、依、り

取如と云僧三仕一門師準くむひらと云ん  
後赤良院踐祚の後上奉天文五年沖師位の礼也  
今正義隆貴料と云ひ有大事大貳補せられ  
正親町院踐祚の後上奉永祿三年沖師位の礼  
あり毛利元就貴料と云へり大徳寺小お  
下さうれりや

嗚呼は君妻礼の極はひひりる悲たのりども  
なすけ付諸別と云れて税賦治せりしころは  
鄙陋者諸侯容儀と云へりお軍衣ら  
戸位のと桂賊の略利と云へり又貴富は天命

○よりの人かたはるもせらるるのいふ是を  
ともし窮困はいせむふ然やむるぬ身は  
たののせと云へり志と云ひ信は  
今の人或は不義の富とたの浮雲の栄と云り或は  
裂<sup>レツキン</sup>衣<sup>ヤスシ</sup>食の美と云て天命と云むのいふはたれ  
る厚福の碑石の迅雷と云きは  
○浮世盛衰自若あり布衣分と云へり流平と  
度一紙片到清曉看雲滿大屋と云ぬ  
いれは案の戸と云へり集とあり

○人妻百歳七十稀一分長老一分癡中心二十餘年

○事後多カ飲樂に疲多カ悲<sup>レ</sup>け詩の心よ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>  
い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>  
けい<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>集十八<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>

○大樹御母<sup>ノ</sup>御位記

藤原朝臣光子

右可從一位

中務慈惠益津温米克依仰<sup>テ</sup>顯賢德大幸<sup>ナ</sup>  
與<sup>テ</sup>無疆壽<sup>ヲ</sup>宜<sup>ク</sup>授<sup>テ</sup>榮<sup>ヲ</sup>將<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>輝<sup>ス</sup>朝章<sup>ヲ</sup>可依<sup>テ</sup>前件<sup>ノ</sup>  
主者苑行<sup>セヨ</sup>

○韓文<sup>ニ</sup>蓋棺事始定

嗚呼人心危<sup>キ</sup>如雲雨豈<sup>レ</sup>於在世定<sup>ヤ</sup>其事可<sup>レ</sup>否<sup>ク</sup>  
唐明皇開元治漢文已來無<sup>レ</sup>出<sup>ル</sup>於其古然<sup>レ</sup>  
至<sup>レ</sup>天<sup>ノ</sup>宝<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>乱<sup>レ</sup>遷<sup>レ</sup>都<sup>ノ</sup>實<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>筑<sup>ル</sup>佳<sup>ノ</sup>城<sup>ノ</sup>前<sup>ノ</sup>不可<sup>レ</sup>輕<sup>ク</sup>定<sup>ム</sup>  
其事<sup>ヲ</sup>

○古歌小

我<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>長<sup>ク</sup>し<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>  
人<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>  
さ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>女<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>  
見<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>  
思<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>



たのまひの眼とありし海無事と人をも

○丹後の侍従のまゝりつりて死流の流よある

糸月我心わきまのしるはまの昔よとて

院まゝいぢりて感一信よとれるとて

○日と三不足

○鞍馬の福の人八幡小義事人多く候と長

寺人云く川の代の信流志ありと又

さひ多し天と世重してあり福とれると

山上の信流志あり候はらふの守護神と

しとて世重の人もとありは多し候と

長遠と求む社中して神人命かき人

といふるも是は災福事天より来りて求む

るも能く人の佛神も来りて候はらふ

○同津閑筆 唐子西庚久茶具戒婦勿求婦

曰何也應之云彼竊者心是物也得其所記

矣人得其所好物得其所託復何言哉婦云嘻

是易得不負輝亦云聚而必散物理之常之

嗚呼世人一畝の微としとも是と久ハ懼くと

して求むよと母を波庸流一ハ友祿

と云ふ付ハ塗子と云ふてはと云ふ

内閣  
内庫

慶應乙丑

是所請要必必教の程子かゝるべき也故

塩尻卷中二十八

00000

